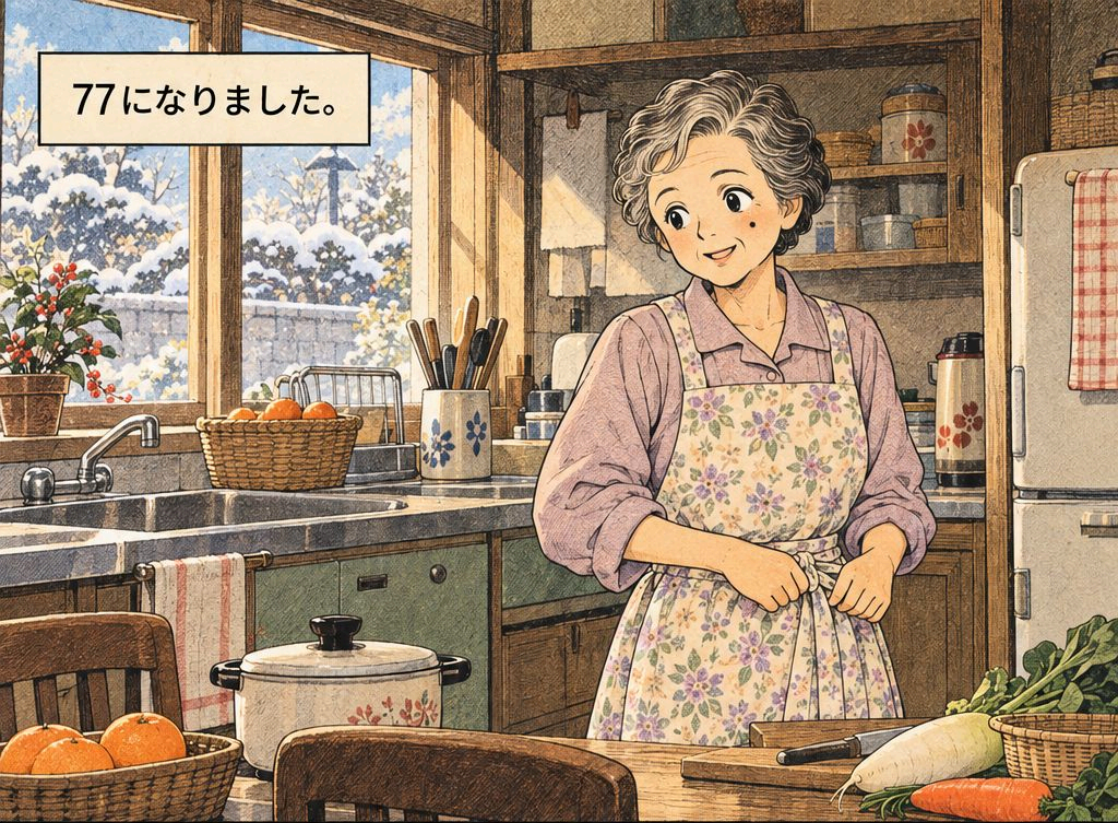


七つの季節、 母の台所



森山和子

77になりました。



お母さんは今日は
主役だから、
座っていて



そう言われても、台所から
音がすると落ち着きません。





この台所は、ふたり並ぶと
肩がふれるくらいの幅しか
ありません。

A woman with short grey hair and a purple shirt is cooking in a red pot on a gas stove. A young girl with dark hair and a brown cardigan is standing next to her, holding chopsticks over a pot of green vegetables. They are both wearing floral aprons. The kitchen is filled with various items like a kettle, jars, and a refrigerator in the background.



急がず、
手を止めず

A close-up of the woman looking down at the red pot on the stove. Steam is rising from the pot. She has a gentle smile on her face.

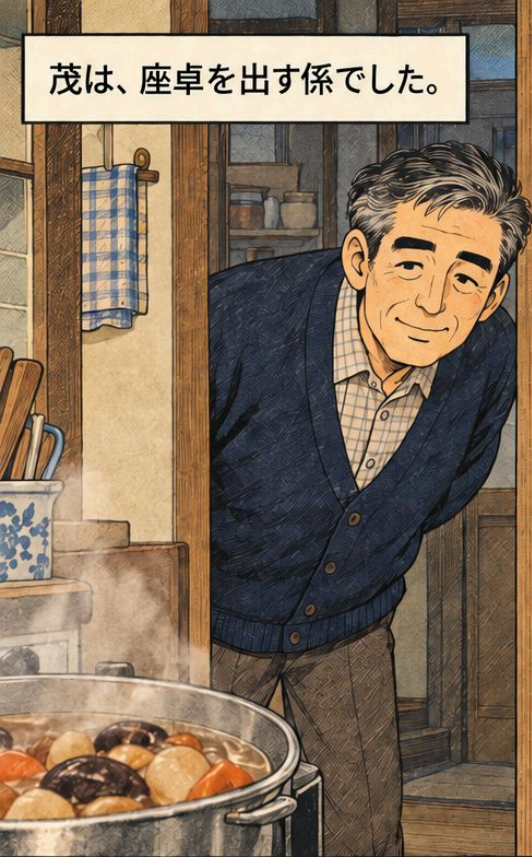


その言葉、
ずっと覚えてたよ

The young girl is speaking to the woman. She is holding chopsticks over a pot of green vegetables. The woman is looking at her with a surprised expression.

3代かかって、ようやく
台所の外へ出ていった
わけです。

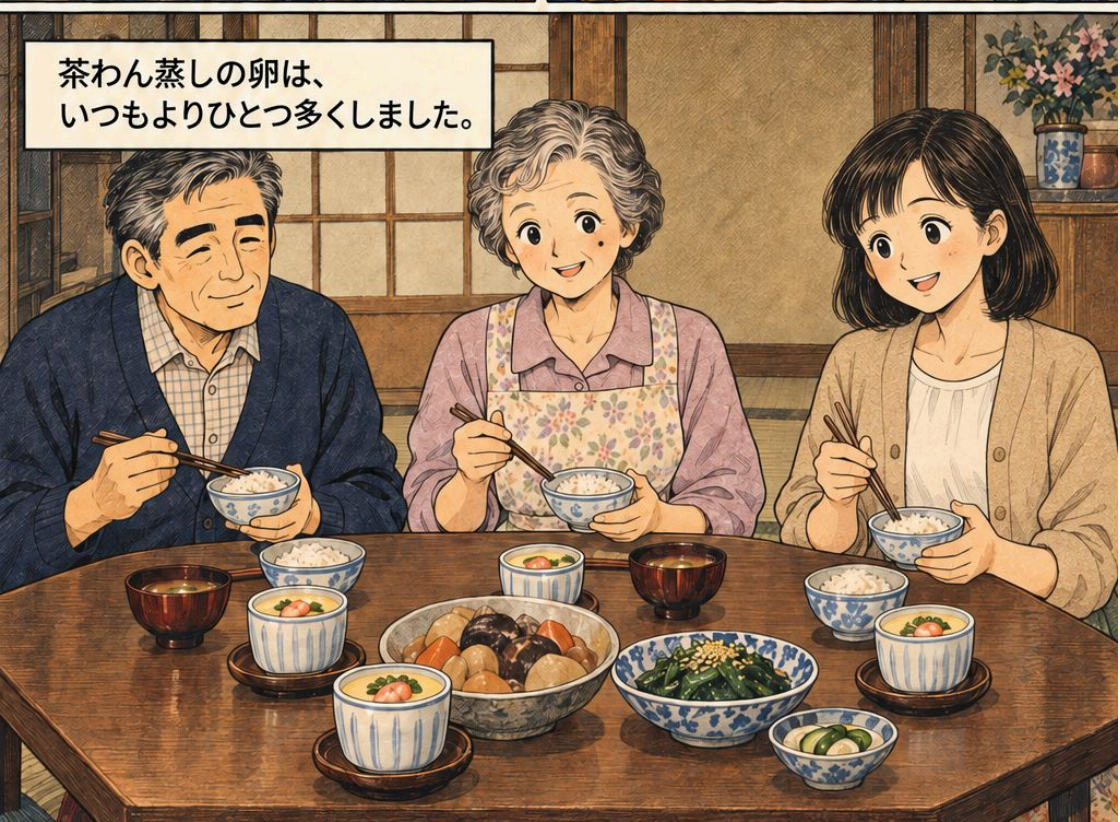
茂は、座卓を出す係でした。



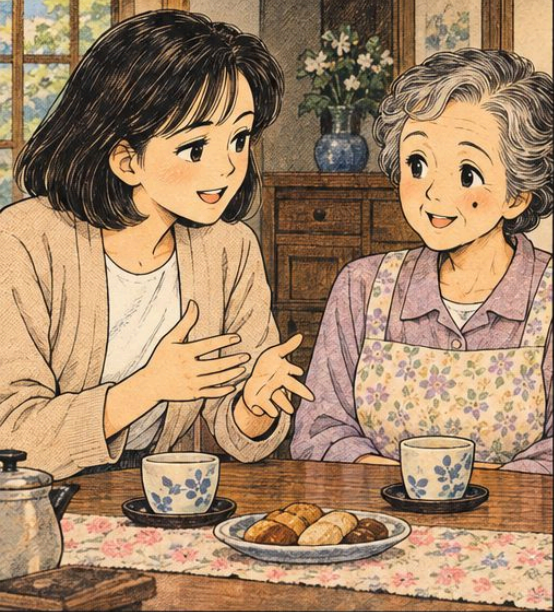
順番に



茶わん蒸しの卵は、
いつもよりひとつ多くしました。



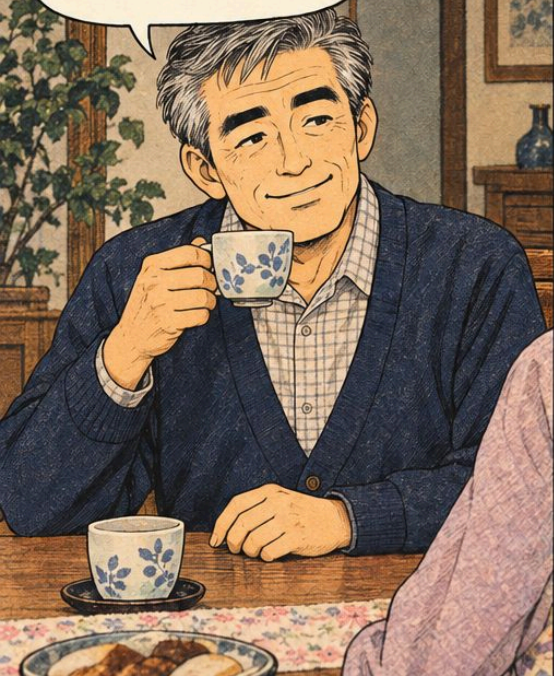
健太とも相談して、春の食事会
までに、私の77年を1冊の本に
したいということです。



本になるような
人生じゃないよ



台所の話だけで、
1冊になる



7つの年代を、順にたどって
みることにしました。



私は昭和24年の1月、花野市の
川沿いの家で生まれました。
父は大工。下に弟がふたりいます。



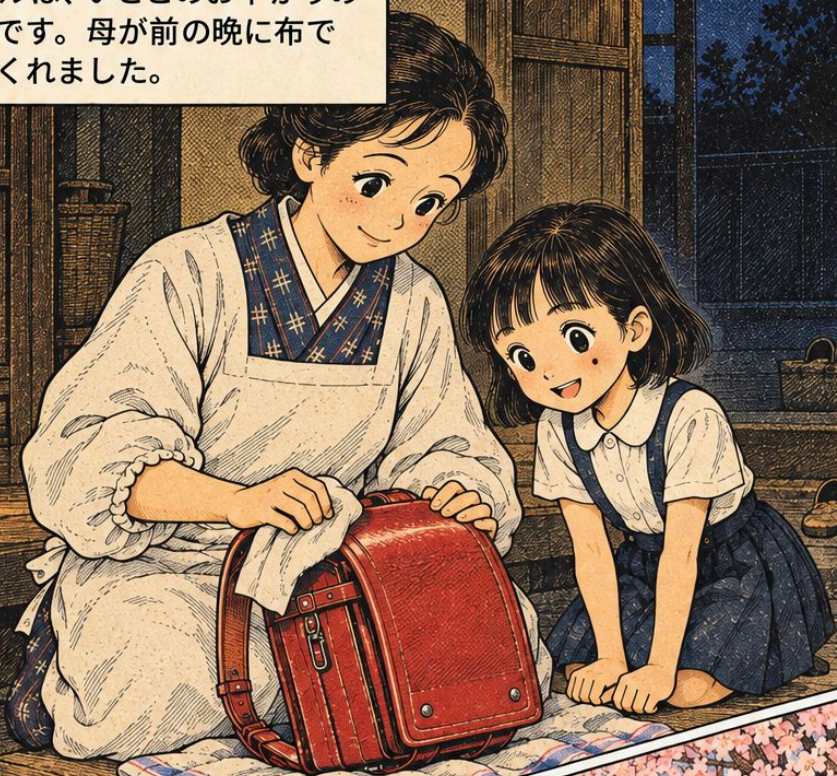
台所は土間でした。母のふみは
毎朝、かまどでごはんを炊いて
いました。



空になった弁当箱を流しに置く音が、
わが家の「ただいま」でした。



ランドセルは、いとこのお下りの
赤いものです。母が前の晩に布で
みがいてくれました。



私はランドセルが見えるように、
わざと横を向いたそうです。



7つになると、
かまどの火の番を任されました。



あぶないから下がつて



火の番には、ごほうびがありました。
釜の底にできる、おこげです。



分けると小さくなるということを、
私はおこげで覚えました。



母に言われて運んだ茶わんを、
落としたことが一度だけあります。
走ったからです。



走ると落とす。立ち止まると冷める。
だから、歩いて運びなさい、
ということです。



高校では図書委員になりました。
気に入った作り方を、ノートに
書き写していました。



私は煮物の写真を、
長いことながめていました。



16の6月、母が実家の田植えを手伝いに、1週間家を空けることになりました。

和子、頼むよ



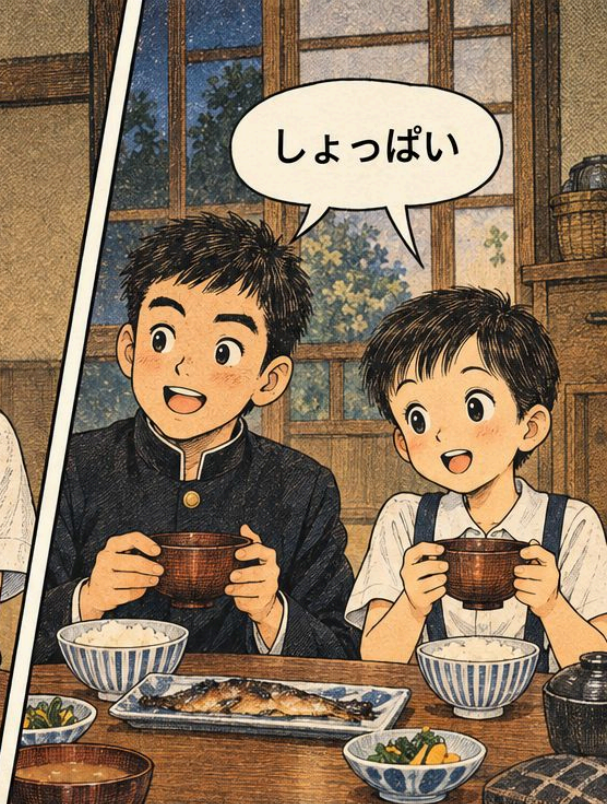
私は張り切りました。ノートがあります。書き写した作り方が、何十もあるのです。



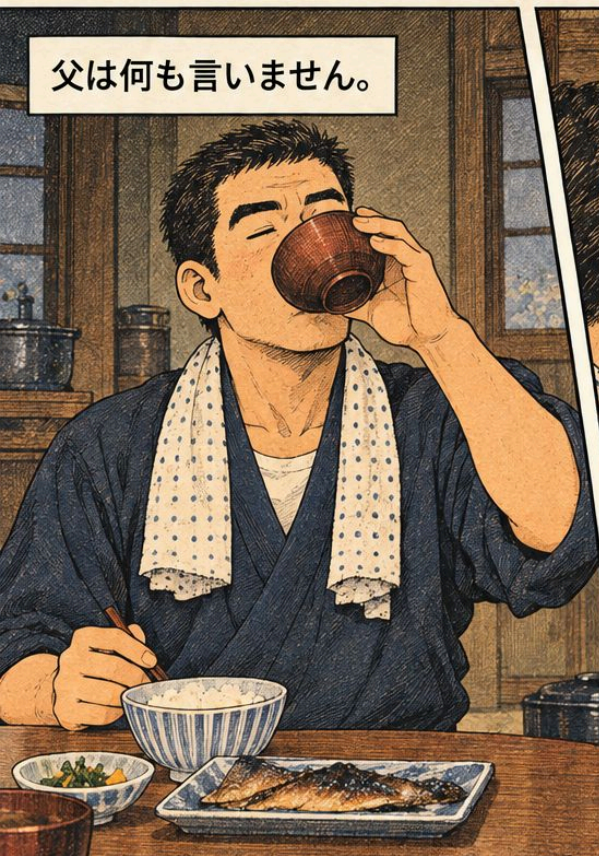
問題は、みそ汁でした。
しょっぱいのです。



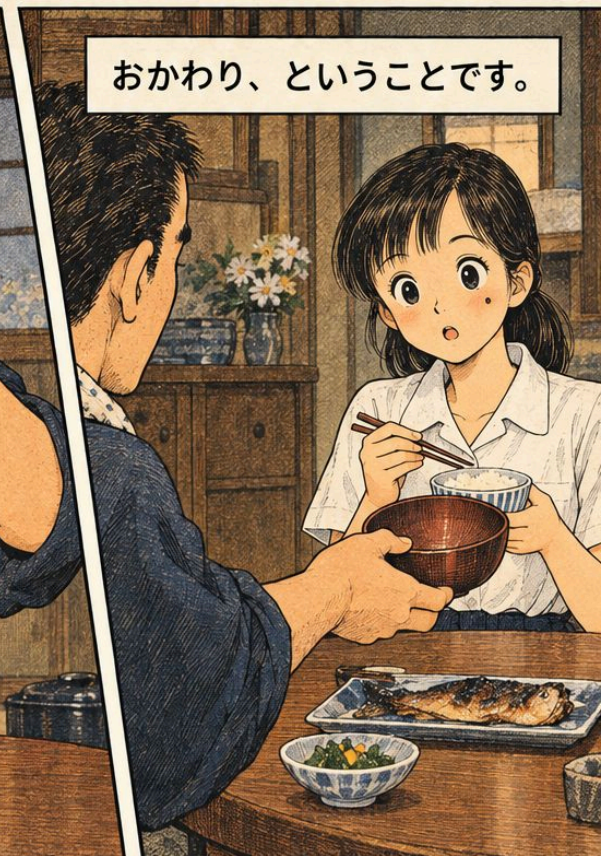
しょっぱい



父は何も言いません。



おかわり、ということです。





次の日から、みそは少しずつ
入れて、そのたびに味を見る
ことにしました。



4日目は茶わん蒸しです。
ところが、蒸し器の場所が
わかりません。その晩、卵は
焼いて出しました。



ほめられたのか、きのうを
けなされたのか、わかりません。

きのうのよりうまい



高校を出て、18の春から、
花野市の小学校の給食室で働きました。
それで300人分を作るのです。



はじめの月は、
腕が上がらなくなりました。



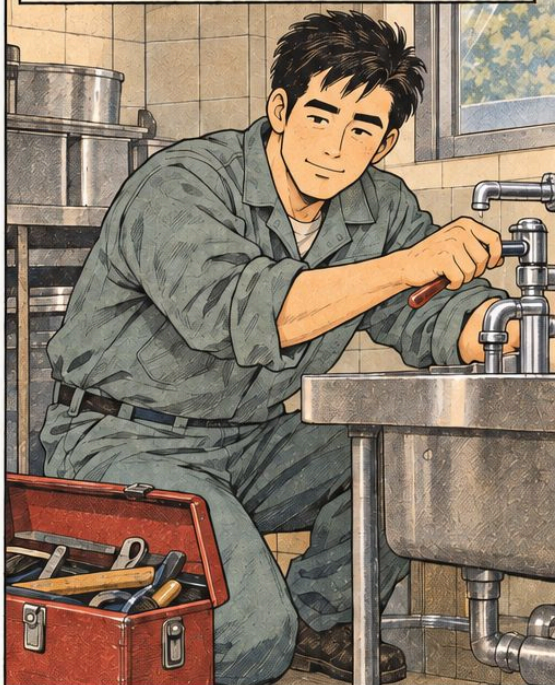
急ぐと、けがをする。
止まると、300人の昼に間に合わない。



きょうの、おいしかった



茂と知り合ったのは、その給食室です。
水道課の茂が、蛇口の修理に来たのです。



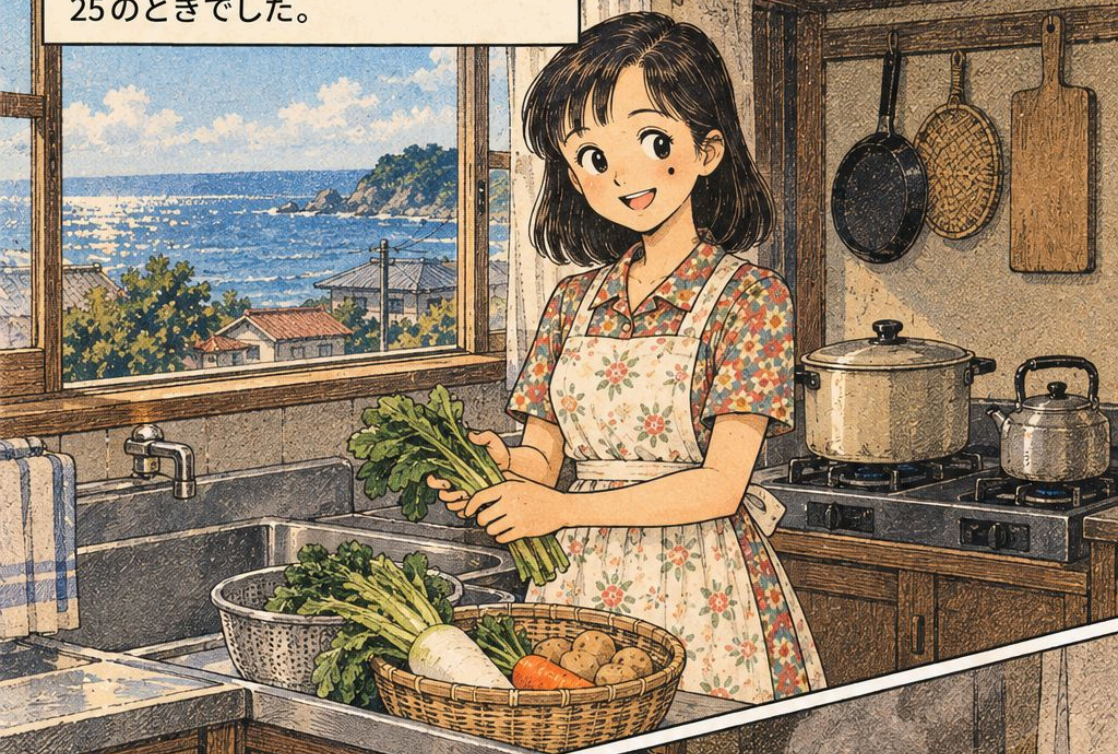
蛇口はすぐになおりました。ところが茂は、
そのあとも点検だと言って、何度か来ました。



点検にしては回数が多い、と先輩たちが
言いだして、それで私も気がつきました。



はじめて自分の台所を持ったのは、
25のときでした。



大きな鍋で煮物を焦がしかけて、
あわてて火を止めたのを覚えています。





急がず、
手を止めず



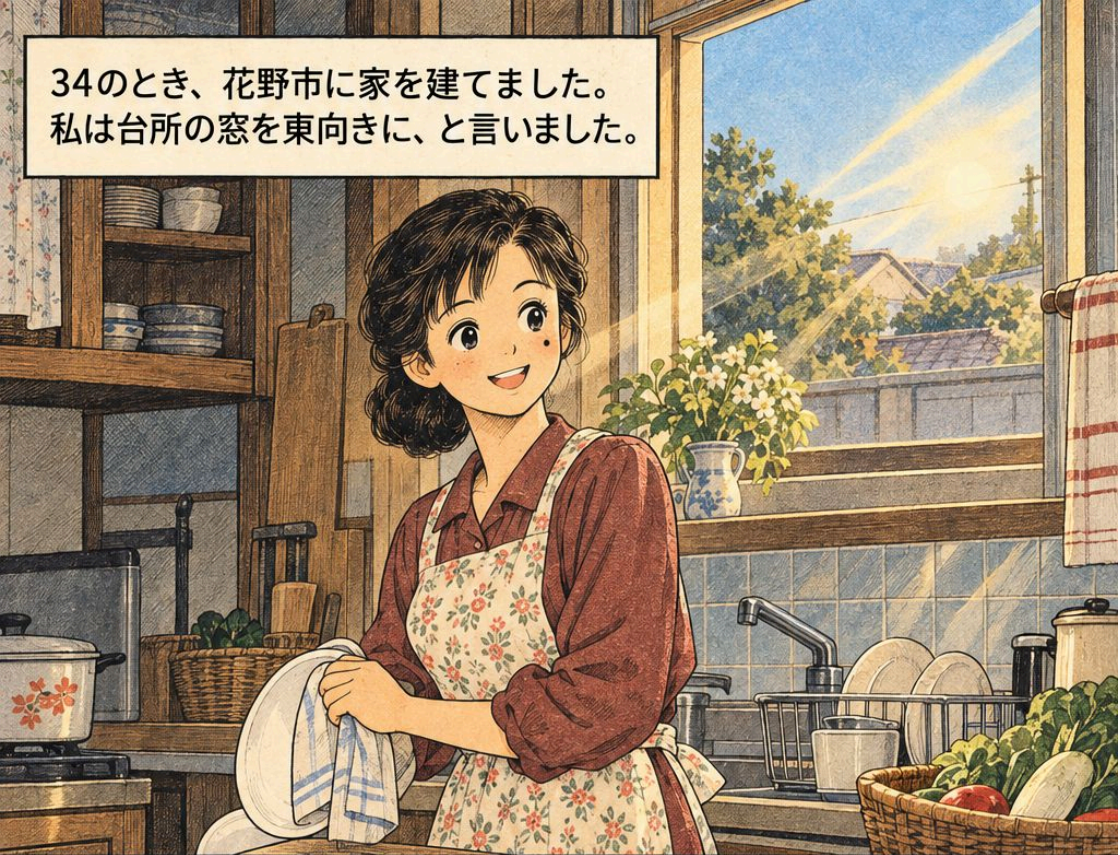
茂ははじめ、何かのおまじない
だと思っていたそうです。



29の年に、直子が生まれました。
あの大きな鍋が、ようやく役に立つよう
になっていきます。



34のとき、花野市に家を建てました。
私は台所の窓を東向きに、と言いました。



台所がせまいぞ



手を伸ばせば
何でも届くほうがいい



直子が小学校に上がった
年のことです。



あじみ



おかあさん、
おいしい!



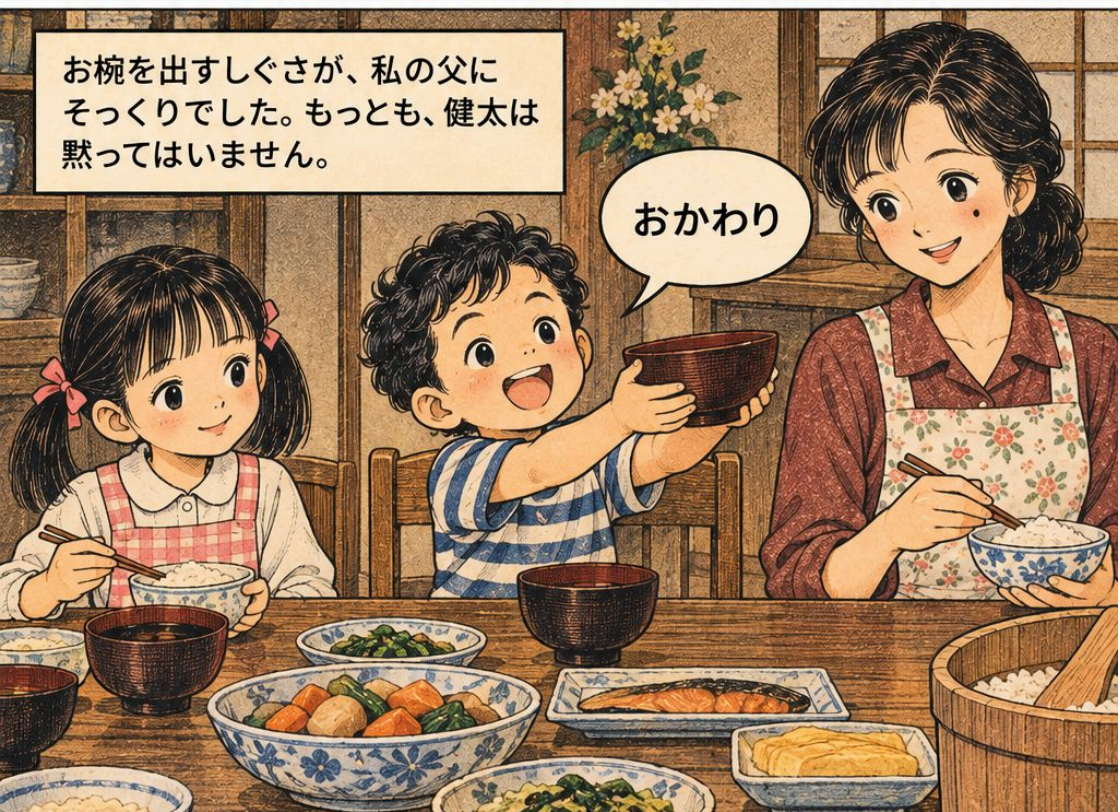
自分で「味見係」と名のっていました。
係ですから、休みません。



健太も姉のまねをして、
踏み台によじのぼろうとします。
ふたりは乗れないので、順番です。



お碗を出すしぐさが、私の父に
そっくりでした。もっとも、健太は
黙ってはいません。





切るのも
やりたい



早く終わらせようとして、
力まかせに押します。
にんじんがころがります。



急がず、手を止めず

気がついたら、母と同じことを
言っていました。



これ、わたしの



42で、給食室の仕事に戻りました。
しゃもじの重さは同じでした。
腕は、ひと月で思い出しました。



5時半に起きて、弁当をふたつ詰めます。
1日じゅう、人の昼ごはんのことを
考えていたことになります。



45の秋、町内の秋祭りで、
豚汁を100人分作るになりました。



急がず、
手を止めず



切る人、洗う人、運ぶ人に分かれて
もらいました。包丁の音がそろって
きました。





配りはじめの時刻には、
ちゃんと間に合いました。



さっきの、
何かの標語ですか

母の口ぐせです



うちでも使います

台所の言葉ですが、
台所の外でも
役に立ちました。

直子の弁当が、半分残って
帰ってくるようになっていました。
けれど、聞きませんでした。



足りなかった



何か言ったほうが
いいんじゃないか



あなたは、焦げた煮物の
とき、何か言った？



言わなかった

48の春、直子の高校最後の
弁当の日です。帰ってきた弁当箱は、
軽くなっていました。



3年分には、短い手紙です。
けれど、私には十分でした。



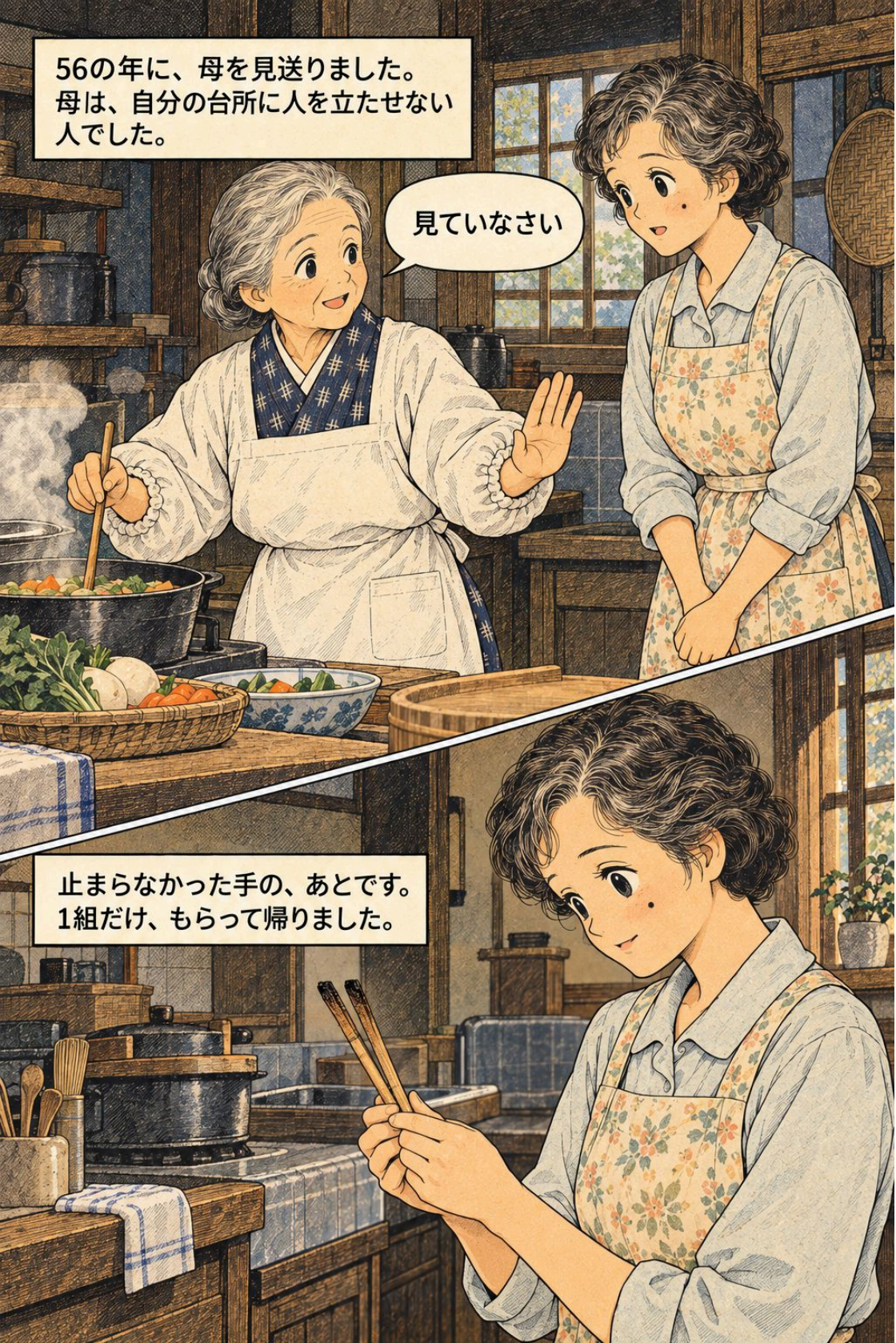
メモは、いまま台所の引き出しに
あります。



56の年に、母を見送りました。
母は、自分の台所に人を立たせない
人でした。

見ていなさい

止まらなかった手の、あとです。
1組だけ、もらって帰りました。



茂が定年を迎えると、私は言いました。
3食のうち1食は、あなたが作ってください。
茂は昼を選びました。



茂のチャーハンは、
しょうゆが多い。

香ばしいだろう



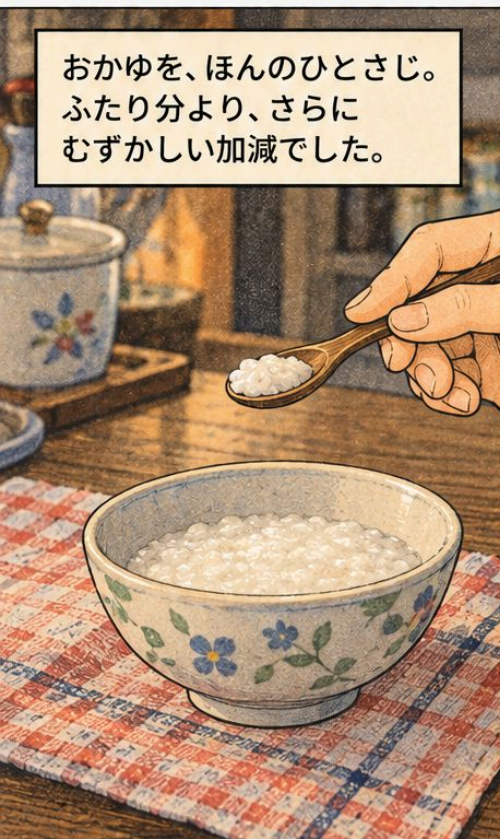
焦がした煮物のときの言葉を、
30年以上たって返されたわけです。
おとなしく食べました。



60で、給食室を退職しました。
同じ年に、初孫の美月が
生まれました。



おかゆを、ほんのひとさじ。
ふたり分より、さらに
むずかしい加減でした。



61の春から、茂と畑を借りました。
はじめの年は、きゅうりを植えすぎました。



日曜の朝市では、いつもはぐれます。
はぐれたら入り口で待つ、というのが、
ふたりの決まりになりました。



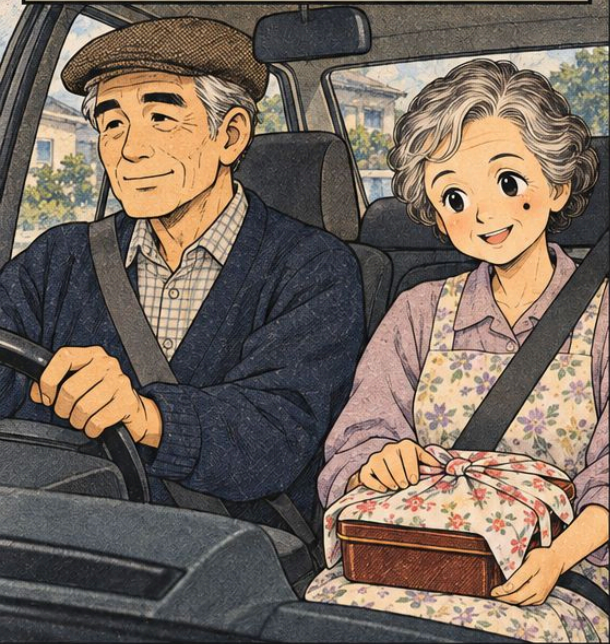
重い、という合図です。



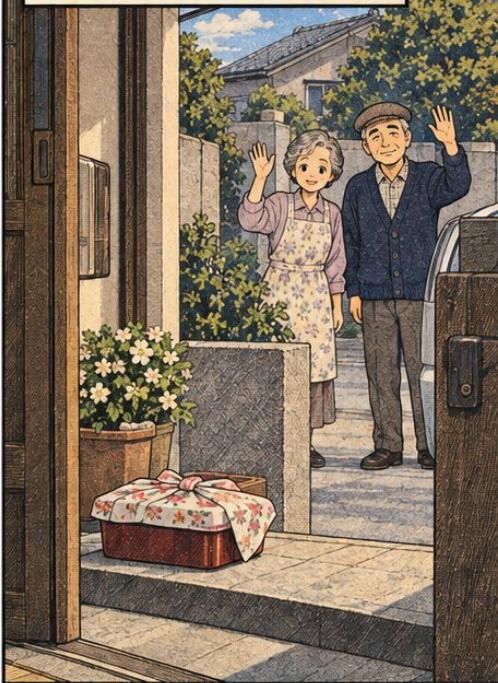
見なかったことにして、
もうひと台、のぞきます。



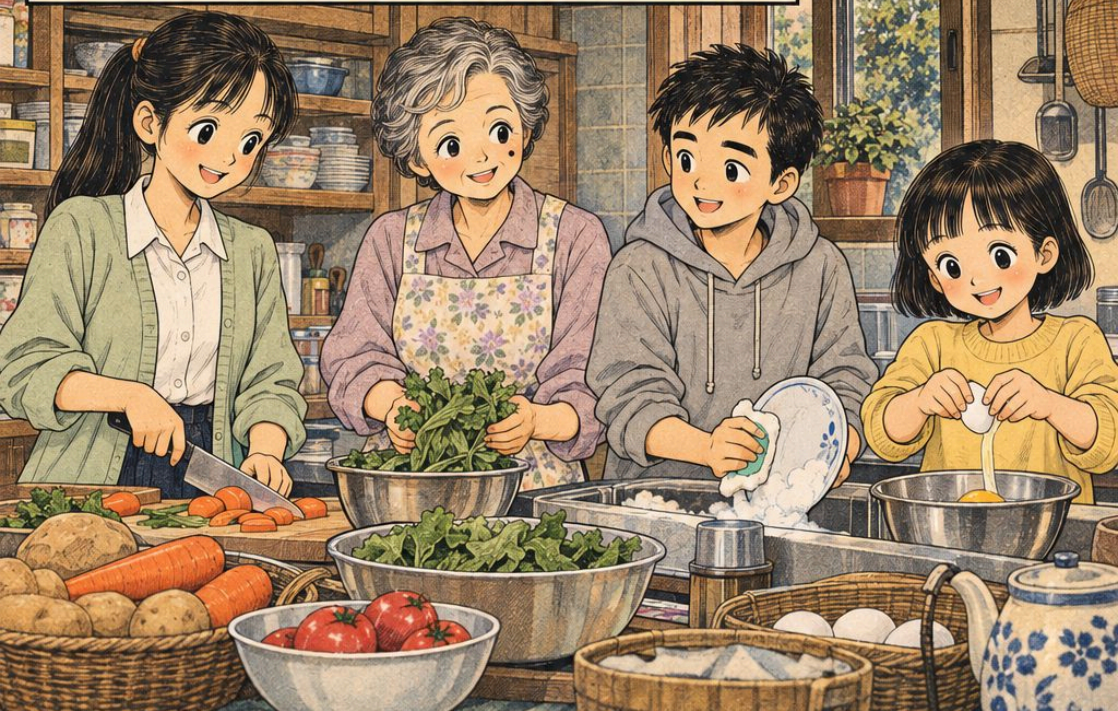
71の年は、家族で集まらない時期が
続きました。煮物を詰めて、子どもたちの
家の玄関先まで届けました。



少しはなれたところから、
手をふって帰りました。



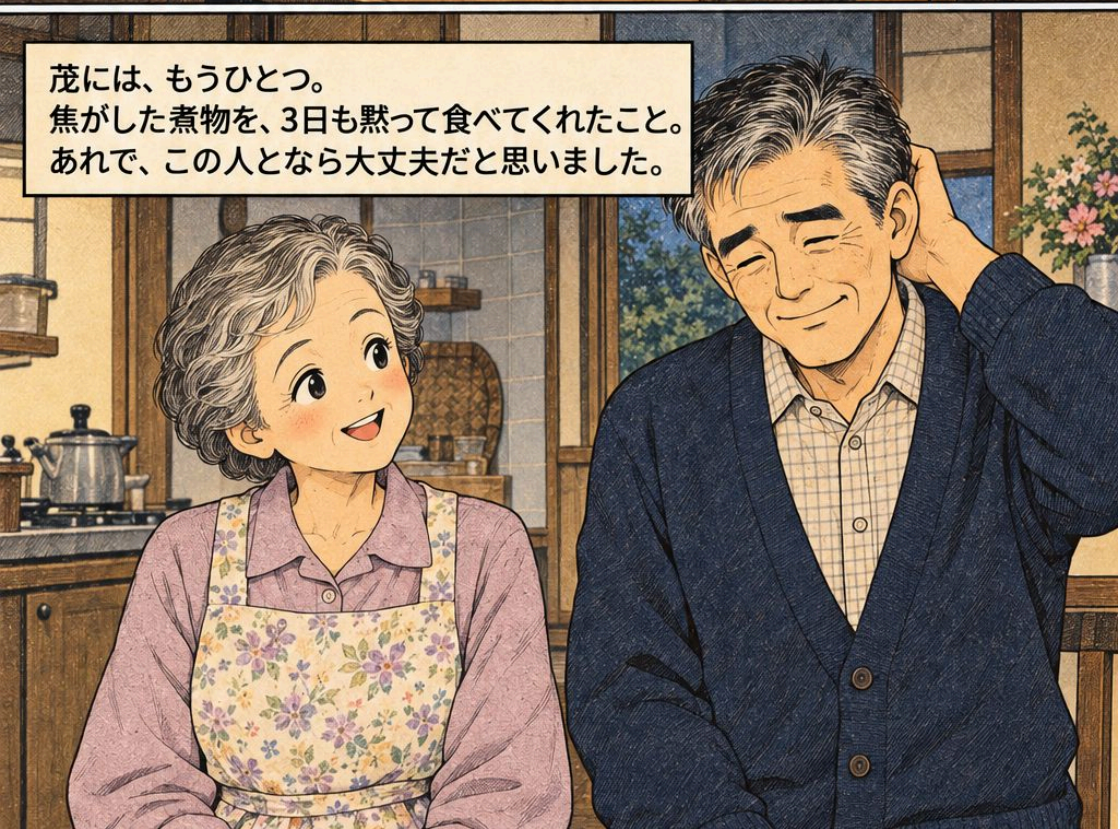
美月は包丁、颯太は洗いの、ひなたは卵を割る係です。
台所は、せまいほうが話がはずみます。



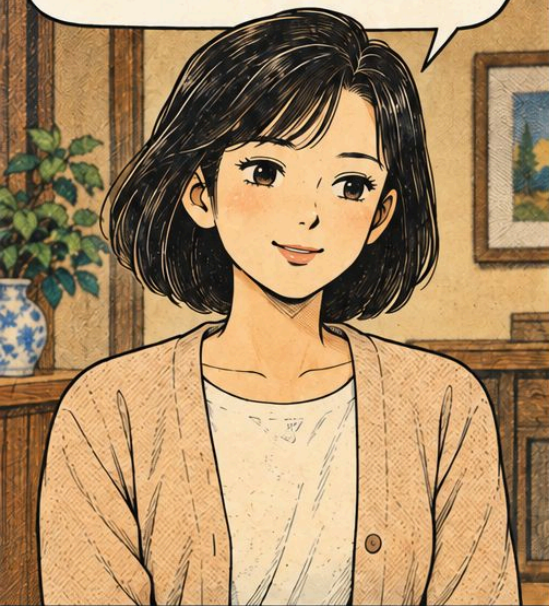
残さず食べてくれて、ありがとう。
空のお皿が、いちばんの励みでした。



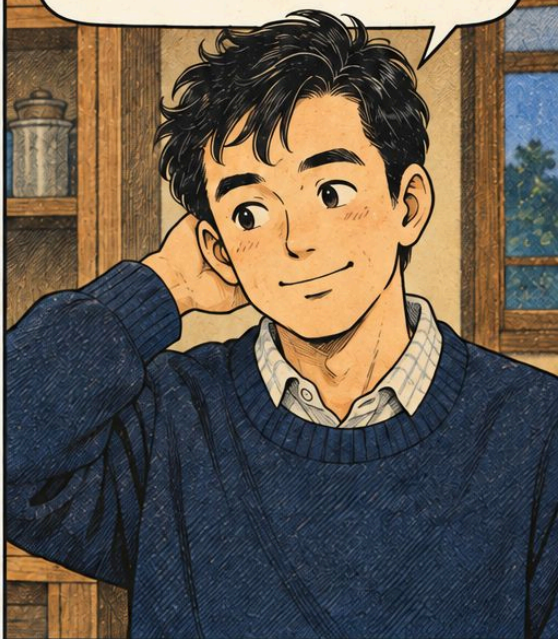
茂には、もうひとつ。
焦がした煮物を、3日も黙って食べてくれたこと。
あれで、この人となら大丈夫だと思いました。



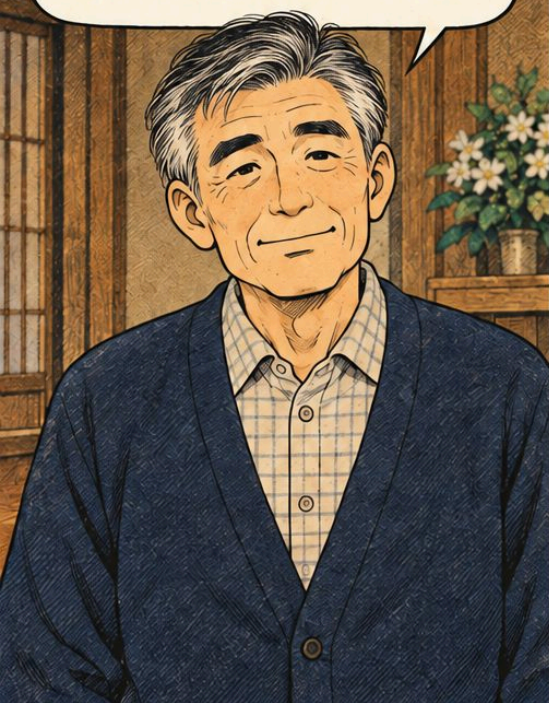
お母さん、弁当を残した日も、
次の朝ちゃんと詰めてくれて
ありがとう。あの言葉は、いま
私が子どもに言っています



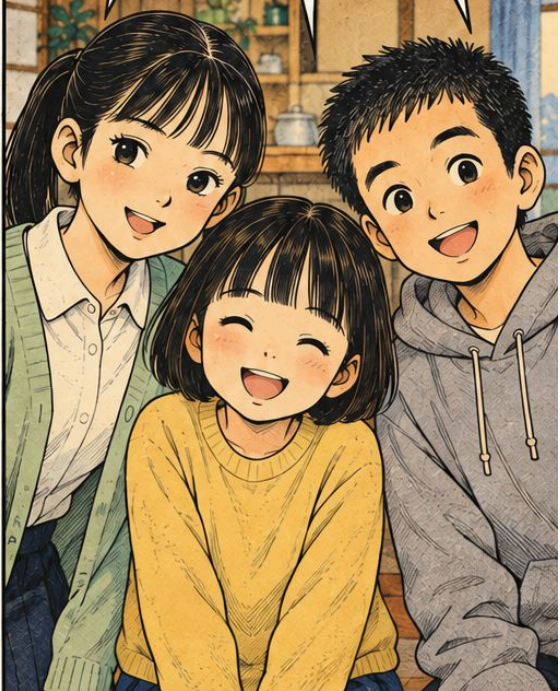
卵焼きは、いまでも甘いのが
好きです。ひなたにも作って
やってください



毎日のごはんを、ありがとう。
朝市は、運転は任せてくれ



ばあば、また台所に入れてね



これからは、茂と各地の朝市へ行きます。
煮物の作り方は、孫が読めるように
ノートに書いておきます。



ごはんを作って、食べてもらって、
また作りました。それを毎日、
続けてただけです。



急がず、手を止めず。母からもらった
この言葉を、直子に、そして孫たちに、
わたしていきます。



奥付

題名: 七つの季節、母の台所

語り: 森山和子

贈り主: 直子・健太と家族一同

版: 見本 第1稿（2026年10月2日）

制作: YNファクトリー / YN出版

この本は、自分史サービスの見本として作った架空サンプルです。登場する人物、地名、出来事はすべて架空で、実在の人物・団体・場所とは関係ありません。